

富山和子の作る日本の米カレンダー2019年版が発売された。残念なお知らせになるが、今号が最終刊となる。初回の発行が1990年(平成2年)なので、まさに平成とともに歩んできた30年になる。平成2年と言えば、ガットウルグアイラウンド交渉の最中で、農業貿易の自由化に関する議論が白熱していた。アメリカ等の農産物輸出国に対し、日本やEU等は、農業の多面的機能を主張し、自由化に歯止めを掛けようとしていた。カレンダーが発刊されたのはそういう時期だった。富山氏はカレンダー20周年を記念して刊行された「水と緑 日本の原風景」(家の光協会)の中で、当時の思いを次のように語られている。

「読者諸氏がしばしば評されたように、私のカレンダー活動は『富山和子の怒りの美学』でした。実際この20年、日本人はなぜ『怒り』を忘れてしまったのでしょうか。折角神様から頂いたこの力を惜しげもなく捨ててしまっただけで、真に人間らしい社会を作ることなど出来ずまいに。…私がカレンダーを作ることに決めたのは、せっぱ詰まった思いからでした。当時、東京では農業悪者論が跋扈し、『あなたは高い国産米を買いますか、安い輸入米を買いますか』と消費者にマイクを向ける、マスコミのキャンペーンはなやかなときでした。『無駄なものを挙げよ』とのアンケートに、『都市の中の農地』と回答する識者たちにも心を痛めました。米の市場開放が迫っていました。私は遅筆なのでとても間に合わない。…そこで選んだのがカレンダーという、写真と活字の組み合わせによる方法でした。カレンダーなら文章が少なくすむし、大人にも子ども、本を読まない人にも見て頂ける。…こうして1990年版からカレンダーの制作が始まったのでした。日本を代表する写真家の作品12枚を選び、そこに私の思想や理論を詩の形で重ね合わせ、写真に新たな魂を吹き込む。いわば入魂です。そのようにして全く新しい世界を作り上げて読者に送り届けるのです」

どうだろうか。30年を経て、筆は円みを帯びては来たが、「怒りの美学」の火はまだ消えていない。二月の「八海山」では、新潟平野の都市部の排水をなぜ農業が負担しなければならないのか訴える。四月の「六道の堤」では桜の名所となっているため池の風景を背景に、ため池の管理についての国民支援を呼びかける。五月の「能登の千枚田」では、文化遺産としての棚田の保全を提案する。八月の「宇摩の水」では、市町村合併で失われた歴史的地名に哀惜の念を示す。十一月では、明治初期、東北・北海道を旅行した英国人紀行作家イザベラ・バードが称賛した日本の風景に思いを馳せながら、「農業農村を守る」という政府にその覚悟のほどを問う。カレンダー30年の歴史を締めくくる十二月では、コメ離れの中での「米の文化」の衰退を憂慮し、その思いを読者に託す。かつてEU本部の農業委員は、「日本の水田の多面的機能については、『日本の米カレンダー』を見て知っている」と日本の代表団に語ったそうだ。そういう力を持ったカレンダーが幕を引く。